

運動会における「学校ダンス」の現代的意義

安広美智子、永野順子、岸田眞弓、渡壁和子、森下はるみ
(聖徳大) (文化女子大) (聖徳大短期大学部) (東京女学館) (比較舞踊学会)

1、目的

本学会「名作を踊る研究会」は、昭和 20 年代まで全国の教育現場で教えられた「学校ダンス」について研究を重ねてきたが、それがどのような形で現代に引き継がれているか、その実態を調査し、現代における「学校ダンス」の意義を検証しようと考えた。本研究では、高校(含：中学併設校)の運動会においてプログラムとして披露されている「学校ダンス」について調査した。

2、方法

調査対象は、運動会において「学校ダンス」がプログラムに組み込まれていると思われる首都圏の高校(含：中学併設校)に個別に聞き取り調査を行った。調査項目は、①指導者について、②採用作品について、③継続理由、④教育的な意義、である。調査は共通の調査用紙を使用した。

3、結果

各学校の運動会における「学校ダンス」の調査結果を事例として以下に挙げる。

事例 1：都立白鷗高校 (中・高)

- ① 昭和 22 年より 61 年まで同一教員が在籍し指導した。東京女子高等師範学校卒の教員。
- ② 作品は「カドリール」。〈白鷗は旧東京府立第 1 高等女学校、第 2 は「ランサース」、第 3、「コチロン」を慣例的に実施していた。〉
- ③ 明治 37 年第 1 回運動会より「カドリール」が踊られている。戦後は、男女共学となったが、高 3 女子生徒が明治時代から継続してきた伝統的なダンスという理由で現在まで継続している。現在では学校の誇りとなっている。
- ④ 生徒の中に「3 年生になったら踊れる」という憧憬の意識が生じてきた。子ども世代が入学してきて、世代を超えた親子共通の経験となっている。

事例 2：東京女学館 (中・高)

- ① 歴代の体育教師によってダンスの内容と指導法が引き継がれて現在に至っている。
- ② 作品は高 2 が「ファウスト」、高 3 が「カドリール・プロムナード」
- ③ 学校の伝統として根付いている。
- ④ 各ダンスを踊ることが、下級生の憧れになっており「やっとならぬ」という声があがる。授業のモチベーションが高くなり、練習にも前向きに取り組んでいる。中学生には戸倉ダンスの基本ステップの練習があり、創作ダンスの際に活用されている。

事例 3：北鎌倉女子学園 (中・高)

- ① 歴代の体育教師が指導。昭和 49 年より同一教員が指導し、現在に至っている。日本女子体育大学卒の教員。
- ② 作品は高 1 「田毎の月」高 2 「メイポール 一園の花」、高 3 「カドリール」
- ③ 学校の伝統として継続されている。作品の完成度が高く、難しい動きはないが、華やかで見ごたえのある作品であると評価されている。
- ④ 生徒達は練習を重ねる中で、集団の中における自分を発見し仲間意識が芽生える。時間をかけて学んだことが習得力を高め、その後ダンス授業に反映されている。

事例 4：桜蔭学園 (中・高)

- ① 体育教師が指導。日本女子体育大学卒の教員が主体となって教えている。

- ② 作品は高3で「みのり」、中3で「マズルカ」
- ③ 伝統を重視する校風があり、お茶大とのつながりから、戸倉ハル作品を大切にしている。
- ④ 最高学年になる自覚ができ、動きや意識に落ち着きが見られるように観察される。

事例5：豊島ヶ岡女子学園（中・高）

- ① 歴代の体育教師が指導。主として日本女子体育大学卒の教員とお茶の水女子大学卒の教員。
- ② 作品は「みのり」他（授業では、これ以外の戸倉ダンスも教えている）
- ③ 体育の授業で「みのり」（高校3年、1学期）など戸倉ハル作品を指導。運動会の各学年のダンス発表作品として高校3年生が「みのり」を選択する年にはプログラムに採用。
- ④ ダンスの基本要素が作品の中に入っており、学校ダンス教材としての価値が認められる。

4、考察

わが国の女学校の運動会は明治30年代から組織的に実施されるようになった。興水は明治期の女学校における運動会の歴史を報告しているが、その中で最も早くから採用され、また、頻度が多い作品である「カドリール」と、明治40年以降加わり、活動的とされる「ファウスト」が今日まで運動会で踊り継がれてきていた。その後、戸倉ハルの集団的要素を含む「みのり」「田毎の月」などの作品が、運動会の花を添えるものとして踊られたが、首都圏の高校において現在も運動会(体育祭)において受け継がれていた。運動会におけるダンスの指導は体育教師であり、指導者が代わることで、継続が困難となり中断してしまった学校があった。そのため転任がない私立学校に伝統としてのダンスが受け継がれている傾向があった。また、運動会の主体者が生徒会に移行することで、生徒の理解を得て継続できるかが一つの課題であった。

明治期に西欧より鹿鳴館時代を経て学校教育に導入された「カドリール」、ボストン体操師範学校のM.B.Gilbert原作で井口阿くりにより普及した「ファウスト」、戸倉ハル作品の「みのり」「田毎の月」「メイポールー園の花」と緩やかな運動で品位のある作品が採択され、それぞれに踊りの心が受け継がれていた。継続理由は、世代を超えて踊り継がれる伝統の重みと完成度の高い名作であると評価されている事であった。また、それを生徒が抵抗なく受け容れていた。作品は現代のリズムダンスにはない優雅で上品なものであり、1つのダンス様式としての価値が認められ、個性、創造性を重視する創作舞踊や表現にも生かされていることが調査により示唆された。

若者世代における「学校ダンス」の現代的意義を考えるに当たり、今回網羅できなかった高校をさらに調査することを今後の課題にしたい。

5、まとめ

- ①指導者は体育教師であり、戸倉ハルの影響を受けた、お茶ノ水女子大、日本女子体育大卒の指導者が多い。主として体育の授業時間を練習に当てていた。
- ②採用作品は、カドリール、ファウスト、みのり、田毎の月、園の花、であり、中学併設校において、中学では桜蔭学園で「マズルカ」を実施しているのみであった。
- ③継続理由は、伝統化されている。上級学年への憧憬があり、生徒の抵抗感がない。作品の力。
- ④教育的な意義として作品完成までには時間を要するが、「身体的・美的効果の統合」「基本技術」「共有性」の習得を目指すことが可能なことなどが挙げられる。

参考文献

- 興水はる海 「明治期における女学校の運動会」学校体育とスポーツ促進運動の歴史国際体育スポーツ史東京セミナー大会組織委員会 1981年
- 松本千代栄 岡野理子「大正・昭和前期の舞踊教育」舞踊学第8号 1985年
- 池間博之 「歴史的舞踊の系譜」6 一鹿鳴館の舞踏一 日本女子体育大学 1998年